

## 『カラマーゾフの兄弟』はなぜ「誤審」で終わっているのか

松原 繁生

はじめに

フョードル・ドストエフスキー(Федор Михайлович Достоевский 1821-1881)は、1876年4月9日付けの手紙で、読者のアルチェーフスカヤからの忠告に対して、評論集『作家の日記』(Дневник писателя, 1873, 1876-77, 1880, 1881)の価値は芸術作品の創作に不可欠な現実を知る事にあると回答している。

お手紙には、私が『日記』で才能をつまらぬことに浪費しているというお考えが述べられていますが、同じ事を当地でも耳にしています。ついでに申し上げますと、私は反駁の余地のない結論に達しました、即ち、作家は、芸術的作家は、美しい芸術以外に、自分の描く現実を微細な点に到るまで正確に(歴史的に、また流れ動いている現在をも)知っていなければならぬ事です。[……]私は、或る大きな長編を書こうとしておりますので、ただの現実ではなく現在流れ動いているものの詳細な調査に没頭しようと思ったのです(実際のところ、ただの現実なら、そこまでしなくとも知っております)、現在流れ動いているものの中で最も重大な課題の一つは、私にとっては、例えば若き世代であり、それと同時に現代ロシアの家庭であります。[……]私はもう 53 歳ですから、少し怠けると直ぐに時代から取り残されます。数日前ゴンチャロフに会いました。私は彼に、流れ動く現代の現実を全て理解しているか、それとも理解する事を止めたのか、と真面目に尋ねました。彼は率直に、多くのものを理解する事をやめたと答えました。[……]「私にとって大切なのは自分の理想と、自分が人生で熱愛したものです。私は自分に残された僅かの年月を愛したものと共に送りたいと思います。あの人たちを研究するのは(彼はネフスキー大通行)を行く群衆を指さして、こう言い足しました)、私には荷がかけすぎます。彼らの為に私の貴重な時間が費やされてしまいますから」。<sup>1</sup>

ドストエフスキーがゴンチャロフと違うのは、流れ動く現代の現実を全て理解しようとすることを最後までやめなかった事にある。<sup>2</sup> 埴谷雄高が「作家としてのドストエフスキイの目立つた特徴をあげてみれば、まず成長する作家ということに気づきます」<sup>3</sup> と書いているのはこの点を指摘しているように思われる。

『カラマーゾフの兄弟』(Братья Карамазовы, 1879-1880)と『罪と罰』(Преступление и наказание, 1866)は、どちらも刑事事件について書かれた長編で、それぞれ裁判についての記述が見られるが、質的にも量的にも対照的である。質的な差で目立つのは量刑の差である。前者では父親殺しの真犯人ではない長男ミーチ

<sup>1</sup> Достоевский Ф.М. Полное собрание сочинений в 30 томах. Письма. 1875-1877. Т. 29. Книга Вторая. Л: Наука, 1986. С. 77-78. 爾後のドストエフスキーの作品や手記からの引用は全て、アカデミー版のこの全集に依拠し、記載にあたっては必要と思われる省略を行う。また、本稿の翻訳は特記しているもの以外は全て筆者による。

<sup>2</sup> 本稿における下線こよる強調は、筆者による。

<sup>3</sup> 埴谷雄高『ドストエフスキイ: その生涯と作品』日本放送出版協会、1965年、10頁。

々に20年の厳刑が科されたのに対し、後者では二人を斧で斬殺したラスコーリニコフに8年という比較的寛大な判決が言い渡されている。量的な差で際立つのは、裁判についての記述量が比較にならない事である。前者では一編全体が90頁に及ぶ裁判の場面であるのに対して、後者では裁判の経過や結果がエピローグで少し述べられているだけで2頁弱にすぎない。『カラマーゾフの兄弟』の裁判の場面を通してドストエフスキーが言いたかった事は何であったのか？ 現在流れ動いているものの詳細な調査に没頭したいと、ドストエフスキーが手紙で回答しているので、『作家の日記』を読めばヒントが掴める筈である。『作家の日記』の裁判事例を調べてみると、実際にドストエフスキーがロシアの裁判に強い関心を持ち、判決ごとに意見を書いている事が分かった。具体例の一つとして1876年10月号の『作家の日記』から「単純な、しかし不可解な事件」(Простое, но мудреное дело)を取り上げる。

10月15日、裁判所で例の継母事件の判決があった。ご記憶であろうが、半年前の5月、6歳になる幼い継娘を4階の窓から投げ捨てたが、何かの奇蹟からか、子どもは無疵で丈夫なままであったという、あの事件である。[……]子供が奇跡的に助かった点を除くと、外見では、事件はかなり単純明瞭である。裁判所でもこの点、すなわち「単純」という点からこの事件に視線を向け、同様に単純至極な形式で、「犯行当時17歳以上20歳未満の犯罪要件に該当するエカチェリーナ・コルニーロヴァを、2年8か月の懲役に処し、その満期後、終身シベリア流刑」という刑に処した。しかし、単純明瞭このうえないにもかかわらず、何か完全には説明しきれないものが残っている。<sup>4</sup>

ドストエフスキーは妊娠時の異常な精神状態が犯行の原因ではないかと弁護の筆を取る。ロシア文学者の米川正夫の文章から、彼の弁護が成功裡に終わった事が分かる。

ドストエフスキーは、殺人未遂の廉でシベリア徒刑を宣告せられた哀れなコルニーロヴァなる一婦人のために弁護の筆を取り、熱烈な調子で無罪を主張したことがある。この一文は社会の激しい輿論を惹起し、ために裁判所は事件の再審理を行った結果、ついに無罪の宣告を下すにいたった。一作家の意見が裁判所の宣告を覆したということは、おそらく他にその類例を見ない。<sup>5</sup>

本稿の目的は、ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』の裁判の場面で言おうとした事の解明にある。その為の具体的な方法として、第一に『作家の日記』に書かれているロシアの公開陪審員制度に対するドストエフスキーの見解を纏めたい。第二に『カラマーゾフの兄弟』の裁判の場面に焦点を当て、被告人であるミーチャと真犯人であるスメルジャコフをドストエフスキーがどのように書いているかについての考察を行

<sup>4</sup> Достоевский. Дневник писателя. Т. 23. Л., 1981. С. 136.

<sup>5</sup> ドストエフスキー/米川正夫訳「作家の日記」、『ドストエフスキー全集15下巻』河出書房新社、1974年、507頁。本書において、米川は「カイーロヴァ」と誤記している。『作家の日記』の別の項での婦人の名前と混同したと思われる。「カイーロヴァ」と原文のまま引用すると、意味不明となるため、本稿では「コルニーロヴァ」に変更して引用している。

いたい。以上を組み合わせる事によってドストエフスキーが言おうとした事が浮かび上がって来るであろう。

『カラマーゾフの兄弟』と『罪と罰』の裁判を比較している先行研究は多いとは言えない。筆者の調べた範囲では、ソ連期の法学研究者カルロヴァによる研究書『ドストエフスキーとロシアの裁判』(1975)、現代ロシアの文学研究者ピリュコフとドボリャーニノヴァ、そしてロシアにおける陪審制に詳しい社会学研究者のグリゴレンコらによる共著である研究書『ロシア古典文学作品における陪審員裁判の社会文化的起源が映し出すもの』(2019)、ロシア文学研究者の番場俊による論考『『罪と罰』の捜査担当官ポルフィーリー・ペトロヴィチ、あるいは文学と法の交錯に関する反人物論的考察』(2010)<sup>6</sup>の三論考に限られる。これら三つに共通して欠けているのは、『カラマーゾフの兄弟』で無実のミーチャをドストエフスキーが懲役 20 年の実刑にしたのは何故か』についての検討や評価が行われていない事にある。『カラマーゾフの兄弟』では、父親殺しの真犯人ではない長男ミーチャに 20 年の厳刑が科されているのに対し、『罪と罰』では、二人を斧で斬殺したラスコーニコフに 8 年という寛大な判決が言い渡されている。この量刑の差が持つ意味についてよく考えてみたい。

## 第1章 ロシアの公開陪審員制度に対するドストエフスキーの見解

ドストエフスキーは、『作家の日記』1877 年 10 月号で、「嘘は真実のために必要である。嘘で嘘を塗り固めると真実になるというのは本当か？」(Ложь необходима для истины. Ложь на ложь дает правду. Правда ли это?)という題で、公開陪審員制度の問題点を指摘している。

それこそが必要なんです、双方からの誇張というやつが！ 陪審員の中には、あまり教養がない上に忙しい人間がいて、店や仕事に追われて集中を欠き、事件に没頭出来ない場合が多い。だから、事件のあらゆる側面、まずあり得ないような場合までも示して、なるほど人間の頭に浮かび得る事は全て論告で示されていると陪審員の理解を深めてやらねばならない、同様に弁護側からも、被告を高嶺の雪よりも潔白に見せる為に、考え得る事が正否を問わず全て示されていると、陪審員を納得させねばならない。[……]一言で言えば、現代の裁判は、単に知性の勝利あるいは最高の結実であるばかりでなく、最高に巧妙なものである。これには同意しないわけにはゆかない。おまけに裁判は公開である。数百人の聴衆が集まる事があるが、果たして聴衆は見世物見物のお祭り気分のみで集まると想像すべきだろうか？ 勿論、否である。聴衆がどんな動機で集まろうと、高潔で、力強い、教化的かつ効率的な印象を抱いて裁判の席を立つべきである。だが実際には、全ての人は傍聴席に座り、そこに何か根本的な虚偽が在るのを見てとるのである。[……]私は帰宅し、一人で考えてみる。検事のイワン・フリストフォールィチは、個人的な知人で、最高に賢く、善良な人物だが、嘘をついた。そして嘘をついた事を自分でも承知していたのだ。ちょっとした譴責、或いはせいぜい禁固 2 ヶ月ぐらゐの事件を、僻遠の地への 20 年

<sup>6</sup> 番場俊『『罪と罰』の捜査担当官ポルフィーリー・ペトロヴィチ、あるいは文学と法の交錯に関する反人物論的考察』『現代思想』38 巻 4 号、2010 年、286-297 頁。

間の流刑へとこじつけた。事件を明瞭にするために必要だったとしても、やはり検事は嘘をついたのだ。意識的に嘘をついたのだ。<sup>7</sup>

陪審員たちに納得して貰う為に、検事と弁護士は細心の準備をして論告と弁護を行うが、双方とも誇張の必要性を感じている。陪審員たちの理解が十分でないからである。知性の勝利や結実が、謳い文句としてもはやされているが、現代の裁判の実態は誇張を重視する巧妙なものになっているとドストエフスキーは指摘している。知己であり、善良なフリストフォルイチ検事が参加する裁判から帰宅したドストエフスキーは、そんな人物でさえ、意識的に嘘をつき、誇張を行わざるを得ない公開陪審員制度の実態に愕然としている。

才能ある弁護人が良心をまげながら、卓越した嘘をつくの聞いて、「まあ、なんて嘘が上手な人でしよう！」と聴衆は自席から拍手を送らんばかりである。これでは大勢の聴衆に、冷笑的態度と偽善が生まれ、知らぬ間に根を張るだろう。渴望されるのは今や真実ではなく才能となり、面白がらせ、気晴らしさせてくれればそれで良いのだ。気絶するほどとんぼ返りをうっても取り戻せないほど、人道的感情が鈍くなる。さらに想像してみていただきたい。もしその嘘つきが驚くべき才能の持ち主だったらどうだろう？ 全てが私のくだらぬ愚痴にすぎないことは、よく承知している。しかし、聞いていただきたい。公開陪審員制度は、ロシア固有のものでなく、外国を模倣したものである。やがていつか、ロシアの国民性とロシア精神とが、好ましからぬ習慣の噛み合わせの悪さを滑らかにし、偽善を撲滅し、万事が真実と真理によって進行する事を期待してはいけなだろうか？

なるほど今は不可能である。弁護側も検事側も、好ましからぬ習慣を利用して脚光を浴びている。一方は金を求め、他方は立身出世を求めている。[……]弁護、検事の双方から、技巧的誇張が姿を消し、真実の探究ごっこではなく、全てが誠意ある本当のものとなる。舞台上で行なわれるのは見世物や演技ではなく、教訓や模範になるのだ。間違いなく弁護士のお礼が遥かに少なくなるだろう。このユートピアが実現されるのは、我々の背中に翼が生えて、みんなが天使に変化した時かもしれない。そうになったら裁判もなくなるのだ……<sup>8</sup>

ドストエフスキーは、検事の嘘に加えて、弁護人の嘘についても指摘している。弁護側は金を求め、論告側は立身出世を求めて現行制度を悪用している現状を見たドストエフスキーは制度改革を訴えており、外国からの借り物でない、ロシアの国民性とロシア精神に基づいたものにしたいとの希望を表明している。ユートピア的な理想であると書きつつも、向かう方向が明快であり、裁判制度改良への熱意が感じられる。この2か月後にドストエフスキーは『作家の日記』を一時休刊して『カラマーゾフの兄弟』を書き始めているので、この引用が『カラマーゾフの兄弟』執筆開始直前の作家の公開陪審員制度に対する最新の見方と考えら

<sup>7</sup> *Достоевский. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1981. С. 53.*

<sup>8</sup> *Достоевский. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1981. С. 54.*

れる。これ以外にも、公開陪審裁判員制度の主要な構成員である陪審員と弁護士について 1873 年の『作家の日記』の「環境 Среда」<sup>9</sup> において言及されている。

ドストエフスキーが最初に言及しているのは評決権を持つ陪審員についてである。ロシアの陪審員裁判では、被告を無罪にしてしまいがちな懲罰回避の傾向が見られるとし、その理由を陪審員制はロシアで考案されたものではないからとして、イギリスと対比しながら、彼は以下のように論じている。

そこ(英国一筆者注)では、これほどの権力が「突如として天から」落ちて来たのではない。陪審員制度そのものが自身で考案したもので、借り物ではなく、何世紀もかけて固め上げ、生活に即して確立したものであり、贈物として受け取ったものではない。英国の陪審員は、法廷に席を占めるやいなや、自分が優しい心を持った感じやすい人間であるだけではなく、まず何よりも公民であることを理解している。彼らは公民としての義務遂行のほうが、個人による心情的善行よりも重要と、おそらく考えるのである。[……]英国の陪審員はかなりの頻度で、心を鬼にして有罪の判決を下している。その理由はほかでもない。国のためなら全国民が自らの血を捧げることを惜しまなかった古き英国の価値観通りに、悪徳(порок)は悪徳と呼ばれ、非道(злодейство)は非道と呼ばれ続けている事と、国家の道徳的基盤が堅固かつ不変で今も厳存している事の二つを、自らの判決文によって全国民に証明する事が、何よりも優先すべき自らの責務であると理解しているからである。<sup>10</sup>

ドストエフスキーは英国の陪審員裁判の中に、公民と個人の在るべき関係性が何世紀もかけて確立されてきた独自なものを見ている。

悪を悪と言わねばならぬ。その代わり、判決の重荷の半分は自ら背負わねばならぬ。我々にも罪があるという考えを抱いて法廷に入ろうではないか。今全ての人が恐れ、法廷を出るときに我々が抱く、この心からの苦痛こそ、我々にとっても罰となるであろう。もしこの苦痛が真実のもので、強いのであれば、苦痛が私たちを浄め、より良い存在にするだろう。自らをより良くすれば、我々は環境をも矯正し、より良きものとするだろう。ただこれによってのみ矯正し得るのである。自らの憐憫を回避し、自ら苦しめぬために、次から次と被告を無罪にしてやる、何と安易な道だろう。こんな事では、犯罪など全く存在せず、全て「環境が悪い」と、徐々に結論づけられていくだろう。<sup>11</sup>

つまり、ドストエフスキーはこう主張している。悪を悪と呼ぼう。その代わりに判決の重荷の半分は自ら背負おう。苦痛は私たちを浄め、より良い存在にするだろう。自分自身がより良くなれば、環境をも矯正し得る

<sup>9</sup> 初年度の 1873 年に限っては、『作家の日記』は独立した刊行物としてではなく、週刊新聞『市民』(Гражданин)の誌面に連載という形で発表されている。

<sup>10</sup> *Достоевский*. Дневник писателя. Т. 21. Л., 1980. С. 14.

<sup>11</sup> *Достоевский*. Дневник писателя. Т. 21. Л., 1980. С. 15-16.

はずだ、と。ここにはドストエフスキーによって考えられた陪審員のあるべき姿が提示されている。

次にドストエフスキーは弁護士について言及している。児童虐待(熱湯で手に酷いやけどを負った赤ん坊)とドメスティック・バイオレンス(百姓の女房が亭主の殴打に耐えかねて縊死)で弱い立場の人たちが虐められている実例をあげて、技巧的誇張によって情状酌量に誘導する弁護士を批判している。

「陪審員の皆さん、この出来事は全くもって人間らしいものとは呼べないものです、しかし、この事件を全体として考えていただきたい。環境、事情というものを考慮願います。この婦人は貧乏なのです。家でたった一人の働き手なのです。不快な事を我慢している。乳母を雇う金さえもない。この悩ましい環境から生じてきた痲癪が、ついには彼女の内部へ入り込んで来るのは自然な事であります。そんな時に彼女が赤ん坊の手を湯口の下へ持ってゆくのは、無理からん事ではありませんか……。[……]おのれの良心に反し、おのれの信念に反し、あらゆる道徳性に反し、あらゆる人間性に反して、弁護士は言い抜けをし、身をかかわたり、嘘をついたりしているではないか！[……]「教育がないせいだ、鈍感なせいだ、憐れんでやりたまえ、環境なんだ」と、百姓側の弁護士は主張した。しかし、百姓は何百万人も存在しているけれど、全員が自分の女房を逆さ吊りにしているわけではない！[……]弁護士諸君よ、諸君の「環境」論での言い抜けは、もう沢山だ。<sup>12</sup>

批判の対象は、二つの実例とも、環境論を振りかざして陪審員たちを安易な情状酌量へと導き、弱者の逃げ場を奪っている弁護士に向かっている。カルロヴァはこの時期の『作家の日記』の評論について言及し、「ドストエフスキーはこの週刊新聞『市民』を倫理と権利の普及活動を行う闘争的な雑誌(боевой орган)に変える事が出来た<sup>13</sup>」と書いて、法学者の立場からドストエフスキーの姿勢に注目している。

『作家の日記』を個人雑誌として出版し始めた 1876 年には、2 月号第 2 章で「クロネベルグの事件に関して」(По поводу дела Кронеберга)の題で、当時著名であった弁護士スパソヴィチを手段を選ばぬ狡猾な男として手厳しく批判している。この「クロネベルグの事件」とは、父親が七つになる娘を手ひどく、残酷に折檻、打擲し、児童虐待の疑いで起訴されたが、結局は無罪になった事件である。

「スパソヴィチ氏」が注目すべき才能のある弁護士である事は、誰もが知っている。この事件における彼の弁論は、私の意見では、最高芸術であると思う。にもかかわらず、彼の弁論は私の心に殆ど嫌悪を催させる印象を残した。[……]彼は聴衆の心から子どもに対する憐憫の心さえも、根こそぎ引き抜いてしまった。ムチの下で 15 分も続いた(5 分でも恐ろしいのに)叫び声「お父ちゃん！お父ちゃん！」、そうした一切のものが消え失せ、舞台の最前列に、「薔薇色の顔つきで、にたにた笑い、狡猾で、心が腐り、悪徳を秘めた、すばしこい小娘」が現れた。「スパソヴィチ氏」は、自分にとって最も危険なものである

<sup>12</sup> *Достоевский*. Дневник писателя. Т. 21. Л., 1980. С. 22-23.

<sup>13</sup> *Карлова Т.С.* Достоевский и Русский суд. Казань: Издательство Казанского Университета. 1975. С. 133.

年齢を、巧妙に封印したので、聴衆は彼女が七つの少女である事を殆ど忘れてしまった。全てを破壊しつくした彼は、当然ながら無罪放免の判決を得た。しかし、「もし陪審員が彼の依頼人を有罪としたら」どうすれば良いのか？ だからこそ、手段を選んだり、お上品ぶってはいられなかったのである。「結果さえ素晴らしければ、手段は選ばない」。<sup>14</sup>

スパソヴィチの嫌悪を催させる手練手管について、ドストエフスキーは24頁の長きにわたって執拗に糾弾し続けている。どうやら彼は『作家の日記』の読者たちにこの事をどうしても訴えたくて仕方がなかったようである。

以上、第1章では、ロシア公開陪審員制度全体と、裁判の主要な構成員である陪審員と弁護士の双方が持つ問題点について、ドストエフスキーの本音と思われるものを紹介した。

## 第2章 『カラマーゾフの兄弟』第12編「誤審」(Судевная ошибка)

第2章では『カラマーゾフの兄弟』の裁判の場面で、被告人であるミーチャと真犯人であるスメルジャコフがドストエフスキーによってどう描かれているかの検討に入りたい。

ここでたちまち問題となるのは、評論集である『作家の日記』の場合とは違って、文学作品である『カラマーゾフの兄弟』からドストエフスキーの本音と思われるものを取り出すのが比較にならない程難しいという事である。というのは、「どちらか一方の優位が明らかな論争はつまらない」<sup>15</sup> という創作手法の下にテキストが書かれているからである。ドストエフスキーの長編は「ポリフォニー」と呼ばれる手法で書かれており、ドストエフスキー自身の思想や主張が仮に作中にあつたとしても、幾重にも相対化が図られていて、見えにくくなっている。例を一つ紹介する。『作家の日記』においてドストエフスキーは人間靈魂の不滅に関する思想をこう述べている。「地上における最高思想はただ一つしかない、すなわち人間靈魂の不滅についての思想である。なぜなら、人が生きる上で依拠する他の全ての「崇高な」人生思想はただこの一つの思想に源を發するからである」(斜体部の強調は原文)<sup>16</sup> と。このような思想は『カラマーゾフの兄弟』におけるイワンとゾシマ長老との会話にも見出す事ができる。

「ええ、僕はそう断言しました。不死がなければ、善行はありません。」「もし、そう信じておられるなら、あなたは幸せなお方か、それともたいそう不幸なお方ということになりますぞ!」「なぜ不幸なのでしょう?」イワンは微笑みかけた。「なぜかと申せば、ご自身の魂の不死も、あなたが教会や教会の問題につ

<sup>14</sup> Достоевский. Дневник писателя. Т. 22. Л., 1981. С. 56-57.

<sup>15</sup> Достоевский. Дневник писателя Т. 21. Л., 1980. С. 7-8. この引用は、1873年の『作家の日記』冒頭部分からのものである。『作家の日記』の編集方針「わたしに衝撃を与えるか、或いはわたしに考え込ませるようなすべての事柄を話題としよう」と明記された後で、ゲルツェンが重視していた創作手法である「どちらか一方の優位が明らかな論争はつまらない」を理解していなかったバリンスキーがゲルツェンにやりこめられたアネクドットが紹介されている。ゲルツェンとの対話が、ドストエフスキーに「衝撃を与えたか、或いは考え込ませた」ことを示す一次資料である。

<sup>16</sup> Достоевский. Дневник писателя. Т. 24. Л., 1982. С. 48.

いて書かれたことさえも、ご自分では信じておられないようにお見受けするからです」。<sup>17</sup>

人間靈魂の不滅の思想は、イワンの思想が確信に基づいていない事をゾシマ長老が看破する会話の中にさりげなく散りばめられている。イワンの信ずる人間靈魂の不滅が実はドストエフスキー自身の思想である事に気づく人は『作家の日記』を読んだ事のある一部の人に限られると思われるし、この文脈で読む限り、イワンの発言をゾシマ長老の発言より優位と見る読者は多くないであろう。ドストエフスキーはそれほどまでに厳格な相対性の下でテキストを書いており、自らの思想を、複数の思想が対等こぶつかりあうポリフォニーの小宇宙の中に散りばめている。上の例に見られるように、一見すると劣位に見える形で提示している事も多いので、隠しているという表現の方が正しいのかもしれない。

第2章では、容易に見出す事の難しいドストエフスキー自身の思想や主張を探る作業を、第1章で考察したドストエフスキーの本音と思われる思想や主張を参考にしながら進めていきたい。

## 第1節 被告人ミーチャ

『カラマーゾフの兄弟』第12編「誤審」の裁判の場面は「運命の日」(Роковой день)という小節から始まっている。

『作家の日記』の中に「数百人の聴衆が集まることもあるが、果たして聴衆は見世物見物のお祭り気分のみで集まると想像すべきだろうか」<sup>18</sup> という記述があったが、小説でも「傍聴券は全て出払い、婦人側は被告ミーチャの味方で、男性側は被告に反感を持っていた」<sup>19</sup> と、裁判の場はさながらスタジアム的な喧噪と応援合戦の様相で書かれていて、お祭り気分が感じられる。続いて高名な弁護士フェチュコーヴィチが紹介されている。しかし、『作家の日記』でドストエフスキーが辛辣に批判した弁護士像を連想させる記述は見られない。他方、検事イッポリト・キリーロヴィチの紹介があり、病的に感受性が強く、一生を通じてついこめざましい地位を確立できなかったという記述は「栄達を欲している」検事像を示唆している。12人からなる陪審員の顔ぶれは、この町の官吏が4人と、商人が2人、それに地元の農民と町人が6人であった。「こんなデリケートで、複雑かつ心理的な事件を、あんな役人どもや、その上に百姓たちの最終裁決に任せて良いものでしょうか」<sup>20</sup> という婦人傍聴者たちの声は、少し前までは農奴であった百姓たちと役人たちが陪審員の多数を占めることへの不満が支配的な廷内の雰囲気を示している。

被告ミーチャの人定尋問に移り、スメルジャコフが自殺した事を聞いたミーチャが思わず放った「畜生には畜生らしい死に方があるのさ！」<sup>21</sup> という捨て台詞が、陪審員や傍聴人の心に不利な印象を与える。「単に知性の勝利あるいは最高の結実であるばかりでなく、最高に巧妙なもの」<sup>22</sup> であるべきとされる「現代の

<sup>17</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 65.

<sup>18</sup> Достоевский. Дневник писателя. Т. 26. Л., 1981. С. 53.

<sup>19</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 90-1.

<sup>20</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 93.

<sup>21</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 94.

<sup>22</sup> Достоевский. Дневник писателя. Т. 22. Л., 1981. С. 53.

公開陪審員制度」において、知性や巧妙さに欠ける被告の野人のような言動が、不利を被りそうな事が容易に想像される。

証人たちの証言の後、医学鑑定の結果についての証言が「医学鑑定と 1 フントのクルミ」(Медицинская экспертиза и один фунт орехов)という小節で行われている。3人の医師が被告の精神状態について異なる証言をしている。医学鑑定は何やら喜劇めいていて、かなり茶化して書かれている。人間の心の動きの機微について医師、医学界は十分に把握していないとドストエフスキーが考えていたのではないかと思われる。この小節では、地元の医師ヘルツエンシュトゥーヴェがミーチャの性質について次の証言を行い、傍聴人に好意的に受取られる。

「1 フントのクルミのお礼にうかがいました。あの頃誰もクルミを買ってくれなかったのに貴方だけが買ってくれました。」と、被告が言うのです。そこで、私は幸せだった自分の若い時代と、靴も履かずに庭を駆け回っていた可哀相な子どもの事を思い出し、胸がひっくり返って言いました。「君は感謝を知っている青年だよ。君が子どもの時にわたしがあげた 1 フントのクルミのことを憶えているのだから。こう言って、私はこの人を抱いて祝福しました」。<sup>23</sup>

この後、被告の親族や婚約者の証言、検事の論告が行われる。「弁護士弁論。両刃の剣」(Речь защитника. Палка о двух концах)という小節で弁護士が最終弁論を行う。

高名な弁護士の最初の発言が響くと、全員が静まり返って、法廷中がじっと見つめた。彼は率直に確信に満ちて語り始めたが傲慢さは少しもなかった。美辞麗句、悲壮な口調、感情に訴える言葉などに頼ろうという意図は少しもなかった。思いを同じくする親密な仲間に向かって話し始めたかのようにであった。声は美しく大きくて親しみがあがり、声そのものに誠実さや純朴さが聞こえるようであった。<sup>24</sup>

弁護士発言は親しみやすかったとしている。弁護士フェチュコーヴィチは、まず検事が学識豊かな心理学者であると紹介した後、心理学について説明する。彼曰く、深遠な学問である心理学からはどのような結論でも導き出すことができる。そして、次いで彼は、検事自身が創作した小説に基づいて論告が行われていると指摘する。「もしこの事件があなたの創作した小説とまるで違って起こっていたらどうなるのか、別の人間がこの事件に介在していたらどうなのでしょう。問題は、あなたが別の人間を創作した点にあるのです」。<sup>25</sup> 検事と弁護士、双方による誇張がロシアの裁判制度の問題点であると『作家の日記』に書かれていたが、ここでは弁護士が検事による誇張を指摘している。弁護士の最終弁論が続き、「金は無かった。強奪も行われなかった」(Денег не было. Грабежа не было)という小節において被告の心理分析が行われている。

<sup>23</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 107.

<sup>24</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 152-3.

<sup>25</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 158-9.

カラマーゾフは二つの極端な深淵を同時に覗けると叫んだのはどなただったのでしょうか。確かにカラマーゾフは天性二つの面、二つの深淵を同時に備えており、だからこそ、遊蕩の抑えがたい要求に駆られても、もしもう一方の面から何か彼を打つならば踏みとどまれるのです。もう一方の面とは愛です。[……]その時、守り袋に入れて身に着け続けていたあの1,500ルーブリをヴェルホーフツェフ嬢(カチェリーナ・イワーノヴナのこと—筆者注)の前に差し出して、「俺は卑劣な男だが泥棒ではない」と言おうという考えが被告に浮かんで来たのです。あの1,500ルーブリを家宝のように大事にして、決して守り袋を開けたり100ルーブリずつ引き出したりしなかったのには、二重の理由があったのです。あなたは何故被告に名誉を重んずる感情がある事を否定なさるのです？ いや、彼には名誉を重んずる感情があります。正しくなくとも、多くの場合誤っていると看做しても、名誉の感情があります。恐ろしいほどあります。<sup>26</sup>

引用文において、愛の重要性や名誉の感情等の指摘が続いており、弁論は被告の心理分析に終始している。弁護士の弁論に必須の要素であると思われる法律の条文解釈はここでは姿を見せない。『作家の日記』において嫌悪の対象とされた辣腕弁護士スパソヴィチとは似ても似つかぬ個性の持ち主(「声そのものに誠実さや純朴さが聞こえる」<sup>27</sup>)であるフェチュコーヴィチを『カラマーゾフの兄弟』に登場させたドストエフスキーの意図は一体何だったのだろうか？ 弁護士による心理分析は続き、「それに殺人もなかった」(Да и убийства не было) という小節においてミーチャは犯人ではないという弁論が行われる。

スヴェートロワ(グルーシェンカのこと—筆者注)が父のところにはいないのを確かめると、彼女が来っていない事と、父親を殺さずに逃げ出せる事に喜びながら、逃げ出したのです。だからこそ、1分後には塀の上から飛び下りて、興奮にかられて殴り倒したグリゴリーに駆け寄ったのです。なぜなら清らかな感情を、同情と憐憫の感情を感じる事ができたからです。父親を殺したいという誘惑から逃れ、父を殺さずにすんだという清らかな心と喜びをわが身に感じたからです。[……]私は被告の人物を知っています。告発者が論告で述べた野蠻で無感覚な非情さは、被告の性格に反しています。彼は自殺したかもしれない、それは間違いのないでしょう。彼が自殺しなかったのは、まさに「母が彼のために祈ってくれた」からであり、また彼の心が父の血に対して潔白だったからなのです。<sup>28</sup>

グリゴリーを殴り倒した凶行の場面で、被告が同情と憐憫の感情を感じた事や、「母が彼のために祈ってくれた」事が弁護士によって語られている。凶行の場面における本文の記述をどのように解釈すべきか迷っていた部分、それが一気に胸に落ちた感覚を持つ読者も少なくないのではないだろうか。わざと曖昧にし

<sup>26</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 159-160.

<sup>27</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 153.

<sup>28</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 163.

ておいたミーチャの行動と心理の謎解きをドストエフスキーがフェチュコヴィチに託しているのではないかという可能性を感じさせる場面である。

父親殺しの真犯人が非嫡出子スメルジャコフであり、ミーチャではない事をドストエフスキーは読者に前もって知らせている。その上でミーチャを有罪にするという決定を行ったドストエフスキーは、同時に陪審員たちや弁護士の個性をどのように設定するかについての決定を迫られた筈である。陪審員たちについては問題にならなかっただろう。陪審員たちは判決を評決する役割を持っているだけであって、質疑に参加したり、発言したりする事はない。有罪という評決結果の発表は必要だが、語り手に託す方式を取れば問題は生じない。このような陪審員たちに比べると、弁護士の個性設定は難問であっただろう。決定済みである懲役 20 年の厳刑に影響を与えない範囲内の役割以外は、選択肢としては残らないからである。無罪判決は明らか寛大な判決にする事も選択肢になり得ないのだから、自らが忌み嫌ひ『作家の日記』において 24 頁にわたって執拗に非難したスパノヴィチに似た個性をもって弁護士を設定する事は出来ない。これらを総合して考えると、ドストエフスキーが自らの思想、特に倫理観についての思想を弁護士に代弁させている可能性が高まってきた。同時に、ミーチャの行動と心理の謎解きを行う役割も弁護士に与えていたのかもしれない。

裁判の場面の検討に戻りたい。「聴衆の意識を弄ぶ扇動家」(Прелободей мысли)という小節において、弁護士は被告の運命に責任を持つべき者は誰かという点に言及する。

彼の運命に責任を負うべき者は誰でしょうか？ 彼が優れた資質を持ち感受性に富む立派な心を持ちながら、あれほど拙劣な育て方をされた責任は誰にあるのでしょうか？ 誰かが彼に常識や分別を教えたのでしょうか、学問を啓発したのでしょうか、幼年時代に少しでも誰かに愛されたのでしょうか？ 私の依頼人は神の思召しの下に野獣のように成長したのです。[……]この演壇を通じロシア全土が我々の声を聞いています。私は、当地の父親だけではなく全ての父親に向かって、「父たる者よ、汝の子どもを悲しませるな」と叫んでいるのです。そうです。我々はまず自分がキリストの遺訓を実行した後に、我々の子どもたちの責任を問うことが許されるのです。さもないと、我々は父親ではなく、子どもたちの敵であり、また彼らも我々の子どもではなく、我々の敵なのです。そして彼らを我々の敵にしたのは我々自身なのです。<sup>29</sup>

「父たる者よ、汝の子どもを悲しませるな」というロシア全土に向かっての発言は道徳律としか呼びようのないものである。情状酌量の面で量刑に多少の影響を与える可能性があるという程度のマイナーな発言にすぎないが、しかしながら、『カラマゾフの兄弟』の大きな主題の一つである父と子の関係という点から見ると、この発言こそドストエフスキーが何よりも言いたかった事であり、全編中の白眉の箇所であると言えるかもしれない。

<sup>29</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 168. С. 170.

これと全く逆の見方をする先行研究が存在する。例えば、ピリュコフ、グリゴレンコ、ドボリャニーノヴァの3人の研究者による『ロシア古典文学作品における陪審員裁判の社会文化的起源が映し出すもの』においては、次のような主張がなされている。

弁護士は、百姓出身の陪審員たちに強い印象を与え、混乱させ、煙に巻く事が可能だと考えていた。他方、ドストエフスキーは百姓出身の陪審員たちを混乱させるのは無理な事を示そうとしていた。ドストエフスキーは、フェチュコーヴィチ(そのモデルは実在の弁護士ヴラジーミル・スパソヴィチで、作家は極端に悪意ありと痛烈に批判している)が、「聴衆の意識を弄ぶ扇動家」(現実にはフェチュコーヴィチ登壇以降の小節に「聴衆の意識を弄ぶ扇動家」という題を付けている)であると批判し、裁判に於ける修辭的雄弁は、考え得るであろう全ての倫理原則に反することが多く、勝利を目指すあまり、弁護士たちが証言や証拠の重要性の否定に留まらず、犯罪自体を否定すると考えていた。<sup>30</sup>

ピリュコフ、グリゴレンコ、ドボリャニーノヴァらは、スパソヴィチに関するものも含む同じ文献を使いながら、『作家の日記』におけるドストエフスキーの主張を文字通りに受取っているようである。然し乍ら、「美辞麗句、悲壮な口調、感情に訴える言葉などに頼ろうという意図は少しもなかった。思いを同じくする親密な仲間に向かって話し始めたかのようにであった。声は美しく大きくて親しみがあり、声そのものに誠実さや純朴さが聞こえるようであった」<sup>31</sup> という箇所を読むなら、「彼の弁論は私の心に殆ど嫌悪を催させる印象を残した」<sup>32</sup> と忌み嫌ったスパソヴィチとは似ても似つかぬタイプの弁護士として、ドストエフスキーがフェチュコーヴィチを設定している事、つまりフェチュコーヴィチとスパソヴィチが同じ穴の貉ではない事が、良く分かるのではないだろうか。

先行研究に欠落していると思われる視点を一つ紹介しておこう。短編小説『おかしな人間の夢—幻想的な物語—』(Сон смешного человека-фантастический рассказ, 1877) についての論文において、現代ロシアのドストエフスキー研究者であるエルモーシンは「ドストエフスキーが『おかしな』(смешной) という単語を使うのは、特に真剣に心から表現したいことを言う時である」<sup>33</sup> と述べている。つまりドストエフスキーは心から表現したい事を書くために短編の題としてわざと смешной の語を採用しているというわけである。エルモーシンの指摘通り、往々にして屈折した意見をわざと表明する事の多いドストエフスキーが、この小節でも「聴衆の意識を弄ぶ扇動家」を題として使っていると、筆者は見ている。

最後に弁護士は慈悲と懲罰について述べ、弁論を終える。

<sup>30</sup> Бирюков Н.Г., Григоренко О.Н., Дворянинова Е.И., Отражение социокультурных истоков суда присяжных в произведениях русской классической литературы. коллективная монография, Ростов-на-Дону: Фонд науки и образования, 2019. С.95.

<sup>31</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 152-3.

<sup>32</sup> Достоевский. Дневник писателя. Т. 22. Л., 1981. С. 56.

<sup>33</sup> Ермошин Ф.А. Пусть не смеются над мной заранее...” Автор как “Смешной человек” в “Дневнике Писателя” Ф.М. Достоевского // Вестник Московского Университета. Сер. 9. Филология. 2009. №5. С. 137.

世の中には、視野の狭さから世間全体を責める人がいます。その人を慈悲で圧倒して下さい、愛を示して下さい。その人は自分の行為を呪うようになります。なぜなら、その人にも良い萌芽が沢山あるからです。その人は成長し、如何に神が憐れみ深く、如何に人々が美しく正しいかに気づくでしょう。彼は恐れ入り、後悔とすぐ前にある無数の義務に圧倒されるでしょう。その時こそ彼は、「おれはもう償いをした」と言わず、「自分は全ての人に対して罪がある、自分は誰よりも不道徳な人間だ」と言うでしょう。後悔と燃えるような苦悩の感動の内に彼は叫ぶでしょう。「立派な人たちばかりだ。自分を破滅させず救おうとしたではないか！」と。ああ、慈悲の実行は容易です。なぜなら、多少とも真実に近い証拠物件が何もない以上、皆さんとしても「はい、有罪です。」と読み上げるのはあまりに嫌なことだからです。一人の罪なき者を罰するより十人の罪ある者を赦せ——前世紀の栄えある我が国の歴史が叫ぶこの重々しい声が皆さんには聞こえますか、聞こえるでしょうか？ 私のようなつまらぬ人間がわざわざ言うまでもありませんが、ロシアの裁判は単なる懲罰のためでなく破滅した人間を救うためにあるのです。他の諸国民は法規と懲罰でやれればいいのです、われわれには精神と意義が、破滅した者の救済と復活があります。<sup>34</sup>

法規と懲罰ではなく、破滅した者の救済と復活——ドストエフスキー思想の中核をなすものが、弁護士士の口からロシア全土に向けて発信されている。弁護士が上記の引用で述べた全ての発言は、ドストエフスキー自身の思想と考えられるものと完全に対応している。<sup>35</sup> 江川卓も、上記引用の末尾（「私のようなつまらぬ人間が」から始まる箇所）を引用し、ゾシマ長老の説いた「罰」論とフェチュコーヴィチ弁護士士の思想はぴたりと対応していると書いている。<sup>36</sup> ぴたりと対応する思想を持つ人の存在に着目している点で、江川と筆者の見解に差はない。違いがあるのは、ゾシマ長老とフェチュコーヴィチ弁護士士の思想の対応を指摘する江川が、『カラマーゾフの兄弟』における両者の発言を比較して、破滅した人間の救済と復活に焦点を当てているのに対して、ドストエフスキーとフェチュコーヴィチ弁護士士の思想の対応を指摘する筆者は、フェチュコーヴィチの慈悲と懲罰についての弁論全体を対象を挙げ、『死の家の記録』、『作家の日記』の二作におけるドストエフスキー思想と『カラマーゾフの兄弟』におけるフェチュコーヴィチ発言を比較している、という点だけである。

ドストエフスキー自身の思想を代弁させる役割を弁護士に任せたと、筆者が考える理由の一つにフェチュ

<sup>34</sup> *Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. JL, 1976. С. 173.*

<sup>35</sup> 「おれはもう償いをした」は『死の家の記録』(*Достоевский. Записки из Мертвого Дома. Т. 4. JL, 1972. С. 15.*)において、「慈悲で圧倒」と「一人の罪なき者を罰するより十人の罪ある者を赦せ」は『作家の日記』(*Достоевский. Дневник писателя. Т. 26. JL, 1984. С. 110.; Т. 23. JL, 1976. С. 139.*)において、それぞれ言明されている。「全ての人に対して罪がある」は後期のドストエフスキーを特徴づける中心的思想の一つと思われる。1873年の『作家の日記』における「自分たちにも罪がある」(*Достоевский. Дневник писателя. Т. 21. JL, 1980. С. 15.*)という言明が、『カラマーゾフの兄弟』において早逝したゾシマ長老の兄マルケルの言葉として再び用いられている事からも、それは明らかである。(*Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. JL, 1976. С. 262.*)

<sup>36</sup> 江川卓 謎解き『カラマーゾフの兄弟』新潮社、1991年、23頁。

コーヴィチ弁護士が姓だけで呼ばれている事がある(弁護士と対決する検事イッポリト・キリーロヴィチは名と父称で呼ばれている)。これには作者のどんな意図があるのであろうか。そもそもフェチュコーヴィチという姓自体が奇妙な語感を持つネーミングである。フェチュコーヴィチ(Фетюкович)という姓の元になったと思われる феток という男性名詞は『岩波ロシア語辞典』には「[俗][罵って]阿呆、間抜け」<sup>37</sup> とある。往々にして屈折した意見をわざと表明する事の多いドストエフスキーが、敢えて小節の題に「聴衆の意識を弄ぶ扇動家」を選んだのではないかと前述したが、この弁護士の名前についてもドストエフスキーが敢えてふざけたものを選んでいてと筆者は考えている。ドストエフスキーは単一の方向に読者を誘導する手法を取らない。何らかの形で暗示を与えながらも、屈折した記述を織り交ぜ、幾重にも相対化を行っているのである。結果として、ドストエフスキーの言おうとしている事に迫る難易度は高いものにならざるを得ない。「これはゾシマ長老の説いた『罰』論にほとんど文字どおりぴたり対応する思想である。ところがそれを論ずるのが「阿保田」さんであるという理由から、この高尚な論議はおのずとカリカチュアに転化せざるをえない」<sup>38</sup> と江川卓が書いているのは、おそらく同じような事を指摘しているように思われる。

判決は有罪で、懲役 20 年という重いものだった事が、「百姓たちが我を張った」(Мужики за себя постояли)という小節で述べられている。量刑の検討を棚上げにして先に進むわけにはいかない。1865 年夏に起稿された『罪と罰』の量刑との対比は重要であろう。ラスコーリニコフは自首と二、三の情状を酌量されて、8 年の第二級懲役刑を宣告されている。

しかし判決は、行われた犯罪からみて、人々が予期したよりも寛大だった。犯人が自己弁護しなかっただけではなく、むしろなるべく自分の罪を重くしようという要望を表明したからであろう。この事件のあらゆる奇怪な、特殊な事情が顧慮された。<sup>39</sup>

二人を斧で斬殺した凶悪犯とは言え、ラスコーリニコフは犯行を自ら認めていたので、裁判に紛糾する要素はなかった。ロシア陪審員裁判制の導入はアレクサンドル二世によって 1864 年に行われている。1865 年夏とされる『罪と罰』起稿の時点までに公開陪審員制度の問題点が蓄積されていたとは思えない。『罪と罰』で裁判の経過や結果が 2 頁しか述べられていない理由の一つかと思われる。制度が本格的にスタートして暫く経つと、本稿第 1 章「ロシアの公開陪審員制度に対するドストエフスキーの見解」で述べた問題点が明らかになり始め、1878 年夏に『カラマーゾフの兄弟』が起稿される頃には、90 頁に及ぶ裁判場面の記述が必要となる程、課題が蓄積されていたのではないだろうか。

「はじめに」で書いたように、先行研究に欠けている問題点は、「ドストエフスキーが無実であるミーチャを

<sup>37</sup> 八杉貞利『岩波ロシア語辞典』岩波書店、1970 年、1435 頁。

<sup>38</sup> 江川卓『謎解き『カラマーゾフの兄弟』』新潮社、1991 年、23 頁。

<sup>39</sup> *Достоевский. Преступление и наказание*. Т. 6. Л., 1973. С. 411.

懲役 20 年の実刑にしたのは何故か』についての検討や評価が行われていない事にある。例として、ビリュコフ、グリゴレンコ、ドボリャニーノヴァの三人が結論としたものを引用する。

ラスコーリニコフは、監獄での懲役によってではなく、魂を良心の裁定に委ね運命を神の御手に手渡すことで、自らの罪を償うことを自ら決定したと言えるだろう。ここに至り作者の物語は、地上の裁判で知覚可能なもの、つまり官僚的な縛りや杓子定規の枠外へと出て行き、神の贖罪と罪深い人の懺悔へと高められるのである。[……]ロシアの陪審員裁判は、二つの正義という思想の担い手となっていた、最高の正義(神による正義)[справедливости высшей (Божественной)]と法的な正義(人による正義)[справедливости юридической (человеческой)]の二つである。[……]ラスコーリニコフの魂は、ソーニャ・マルメラドヴァ自身の愛によって救済され、ミーチャの魂はグルーシェンカとアリョーシャによって救われる、一方で、真摯に罪を自覚するネフリユドフ公爵の魂はカチューシャが救う、カチューシャの救済は本質的には必要がなかった、何となれば、「彼らは心の奥で、真正の至高なるものを神に見ていた」からであった。そして悔悟する罪人にとって、地上のどの裁判も恐ろしいものではないし、体刑にて、行き場のない魂の深淵から広がっていった贖罪行為のほんの小さな部分にすぎないのである。<sup>40</sup>

筆者が見るに、この結論は誤審をやむを得ないものとしているようである。すなわち、「人による裁判は時として誤審を生み得るものだが、悔悟して神の御手に委ねさえすれば神がお見捨てになる事はない」という風に。なるほど、「悔悟する罪人にとって、地上のどの裁判も恐ろしいものではない」という結論は、『罪と罰』執筆時点に限定すれば、ドストエフスキー思想の一端を示すものかもしれない。けれども、本稿が解明すべきことは『カラマーゾフの兄弟』執筆時においてもドストエフスキーが依然としてそのように考えていたかの、この一点にある。これについては「おわりに」でもう一度取り上げたい。

筆者は第 12 編「誤審」がロシア社会とロシア国民に対する提言のために書かれた章と考えている。提言という発想自体は突飛なものではない。米川正夫が「一作家の意見が裁判所の宣告を覆したということは、おそらく他にその類例を見ないところ」<sup>41</sup>と書いている通り、ドストエフスキーはコルニーロヴァ事件で提言を既に行っており、立派な成功体験を持っている。ここで解明が必要となるのが、『カラマーゾフの兄弟』をコルニーロヴァ事件のようにハッピーエンドで終わらせなかった事と提言、これらがどのように繋がるのかという問題である。

ドストエフスキーの立場に立って考えてみる。ミーチャが真犯人でない事は読者周知の事実である。しかも、フェチュコーヴィチという高名な弁護士が聴衆をうならせる弁論を行ったにもかかわらず、懲役 20 年の厳刑がミーチャに科されている。読者は現行の陪審員制度に重大な欠陥があると憤慨するに違いない。筆

<sup>40</sup> Бирюков, Григоренко, Дворянинова. Отражение социокультурных истоков суда присяжных в произведениях русской классической литературы. коллективная монография. С. 106.

<sup>41</sup> 米川正夫「訳者解説」、前掲『ドストエフスキー全集 15 下巻』、507 頁。

者が考えるに、重い量刑を科すことによって、憤激で社会を揺り動かし、そして結果的には提言の方向へ導くことができると、ドストエフスキー自身が判断したのではないだろうか。ハッピーエンドで終わらせて読者に束の間の満足感を与える事が何の解決策にもならない事を、「不信と懐疑の子」<sup>42</sup>を自認していたドストエフスキーは百も承知だったと思われる。

量刑を 20 年に決めた理由については二つの可能性が考えられる。オムスク監獄の囚人仲間の一人で父親を殺害したとされる貴族についての、「彼は自白しなかったが、爵位と官位を剥奪されて、20 年の流刑に処せられた」<sup>43</sup> という記述が『死の家の記録』にあり、これをそのまま採用したというのが第一の可能性である。但し、これは 1840 年代という古い判例なので、尊属殺人の量刑として 20 年が一つの基準であった時代が存在したという事実を証明する史料の一つになるとしても、30 年後の陪審員制度の量刑としてこれが適当であるかどうかは分からない。第二の可能性は、「ほんのちょっとした譴責、或いはせいぜい禁固 2 ヶ月ぐらゐの事件を、僻遠の地への 20 年間の流刑へとこじつけた。事件を明瞭にするために必要だとしても、やはり検事は嘘をついたのだ」<sup>44</sup> という第 1 章で引用した『作家の日記』における記述を、ドストエフスキーが刑期も含めそのまま採用しているというものである。時代的にも、また「誤審」というその内容からも、第二の可能性が量刑を 20 年に決めた理由であるように思われる。

## 第 2 節 真犯人スメルジャコフ

「スメルジャコフ論」(Траггат о Смердякове)という小節において、検事はスメルジャコフの人物像を、「良く分からなかった教えを幾つか消化不良のまま残している愚鈍な男で、自らの知力に合わない哲学的な思想に頭が混乱し責務や義務についての最新の学説に驚いている人間」<sup>45</sup>として提示している。

この男は、持病である癲癇と、突発的な異変の為に憂鬱症の発作を起こして昨日縊死いたしました。首を吊るに際して、『誰にも罪を及ぼさない為に、自らの意志と望みによって、自らを根絶する。』と独特なスタイルで書かれた遺書を残しています。殺人者は自分であってカラマーゾフではない、こう付け加えることは何でもない事です。ところがスメルジャコフはそうしなかった。一方で良心の呵責を感じ、他方では感じなかったのでしょうか？<sup>46</sup>

これに対し、弁護士は検事とは異なるスメルジャコフ論を展開している。

私はスメルジャコフを訪ね、彼に会って話をしましたが、彼が私に与えた印象は全く違ったものでした。

<sup>42</sup> *Достоевский*. Письма. Т. 28. Л., 1986. С. 176.

<sup>43</sup> *Достоевский*. Записки из Мертвого Дома. Т. 4. Л., 1972. С. 16.

<sup>44</sup> *Достоевский*. Дневник писателя. Т. 22. Л., 1981. С.52-4.

<sup>45</sup> *Достоевский*. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 136.

<sup>46</sup> *Достоевский*. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 141.

[……]とりわけ私は彼に小心さを、検事があれほど特徴的に描写された、あの小心さを見る事が出来ませんでした。正直さなどは全く見られず、反対に私が見たのは、ナイーブさの下に潜む、怖ろしい猜疑心と、殆どの事を見抜ける知力でした。ああ、検事が彼を愚鈍な男とみたのは、あまりにも単純な見解なのです。私は彼から極めて決定的な印象を受けました。私はこの人物が決定的に意地が悪く、過度な野心家で、復讐心に満ち、火のような嫉妬心を持った男だという確信を抱いて、彼のところを去りました。私が集めた幾つかの情報に拠りますと、彼は自分の出生に嫌悪を感じ、出生を恥じて、歯ぎしりをしながら、『俺は悪臭を放つ女(スメルジャールシチャヤ)から生まれたんだ』と言っていたそうです。子ども時代の恩人である召使のグリゴリーとその妻に対しても敬意を払っていなかった。ロシアを呪い、ロシアを嘲笑い、フランスへ行って、帰化するのだと夢想していました。彼はそのためには資力が足りないと、何度となく話していたようです。彼は自分以外はだれ一人愛さず、代わりに奇妙に思えるほどまでに自分を高く買っていたように、私には思われます。彼が考える文明とは、上等な服、清潔なシャツと、綺麗に磨かれた靴でした。自分で、自分をカラマーゾフの非嫡出子と考えていましたので(これは証拠があります)、雇い主の嫡出子たちと較べた際の自分の境遇を憎悪していたの違いありません。彼らには、そう嫡出子らには全てがあるのに、彼には何も無い。嫡出子らには全ての権利があり遺産の相続権があるのに、自分は一介の料理人に過ぎないという事です。<sup>47</sup>

ここでは弁護士によるスメルジャールシチャヤの叙述が述べられている。子ども時代の育ての親である召使のグリゴリー夫妻に敬意を払っていなかったという箇所は、1フントのクルミの恩を長じても忘れていなかったミーチャと対照的である。

次に告発者はこうも叫ばれました。それならばなぜ、なぜスメルジャールシチャヤは遺書のみでそう告白しなかったのか、『一方で良心の呵責を感じながら、他方では感じなかったのか』と。しかし失礼ながら、良心の呵責とは即ち後悔であり、この自殺者には後悔などあり得なかったのです。あったのはただ絶望だけです。絶望と後悔は全く異なったものなのです。絶望は悪意に満ち、折り合いのつけようがなかったかもしれません。そしてこの自殺者は自殺する瞬間に、一生の間羨んできた人々を以前の二倍憎悪していたかもしれません。<sup>48</sup>

弁護士が締めくくるスメルジャールシチャヤ論である。ドストエフスキーが弁護士に自らの思想を代弁する役割を任せていたとするなら、ドストエフスキー自身の意見という事になる。真犯人スメルジャールシチャヤについては、より深く考える必要があると思うので、裁判の場面以外の本文中から二点引用する。まず、小節「ギターを爪弾くスメルジャールシチャヤ」(Смердяков с гитарой)において、スメルジャールシチャヤが若い女性マリヤと語っている

<sup>47</sup> *Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 164-5.*

<sup>48</sup> *Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 166.*

場面である。

生まれ落ちた時からこんな運命でなければ、僕はもっと色々出来たでしょうし、もっと物知りになっていましたね。僕の事を悪臭を放つ女(スメルジャーシチャヤ)から生まれた父なし子だから卑しい男だなんて言う奴がいたら、決闘してピストルで撃ち殺してしまいますよ。モスクワへ行ってまで、面と向かってそう言われた事があるんです。グリゴリー・ワシーリエヴィチ(育ての親—筆者注)がこの町から噂を流したんでね。<sup>49</sup>

ギターを奏でながらのデートの場面に相応しくない発言をスメルジャコーフがしていて、生みの親と育ての親への怨みが大きかったことを示している。次に、小節「コニャックを飲みながら」(За коньячком)において、父親フォードルがイワンに語るスメルジャコーフ評である。

「わたしはちゃんと分かっているが、あいつはわたしという人間が我慢ならんのだ。他の者たちも同じで我慢ならんのだ。いやお前だってそうさ。お前の方では、スメルジャコーフがお前を『尊敬する気になった』と感じているかもしれないが。アリューシャなんかは、もちろんそうだ。あいつはアリューシャを軽蔑してるよ」。<sup>50</sup>

フォードルのこの発言は、スメルジャコーフが「自殺する瞬間に、一生の間うらやんで来た人々を以前の二倍憎悪していた」というフェチュコーヴィチ弁護士の意見と一致している。

スメルジャコーフと少年イリューシャは針入りのパンを犬のジューチカに食べさせる。実行者の二人以外に針入りパンの事を知る人はおらず、誰からも非難を受けなかったが、イリューシャはどうにもならない程後悔し、自律的な罰に苦しみ続ける。イリューシャとは異なり、スメルジャコーフは自律的な罰を感じない。愛する事も愛される事も知らず、自分の出生を呪うスメルジャコーフには自殺する以外の選択肢は残らない。

この演壇を通じロシア全土がわれわれの声を聞いています。私は、当地の父親だけではなく全ての父親に向かって、「父たる者よ、なんじの子どもを悲しませるな」と叫んでいるのです。<sup>51</sup>

父子の望ましい関係についての弁護士の上記の発言を被告人ミーチャの所で引用したが、ミーチャの運命に大きな問題があるとドストエフスキーが考えていたようには思えない。たとえ野獣のように成長しても1フントのクルミの恩を忘れないミーチャは感受性に富んだ男であり、苦悩する事もできて、自律的な罰のメカニズムはそれなりに働いている。スメルジャコーフの救済はより難問である。生みの父にも育ての父にも

<sup>49</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 204.

<sup>50</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 122.

<sup>51</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 168. С. 170.

怨念しか感じない、荒み切ったスメルジャコフには自律的な罰のメカニズムは働かず、苦悩が生じる事はない。ドストエフスキーはスメルジャコフの救済策を考えぬいた上で、最終的には、第二、第三のスメルジャコフを出現させない為に、全ての父親に向かって子どもたちの敵になるなど弁護士に叫ばせる選択をしたように思われる。二人目のスメルジャコフを出現させない為の弁護士の提言はあくまで次善の策に過ぎず、スメルジャコフの自殺をやめさせる効果を持つものではない。スメルジャコフが抱える問題はそれほどまでに深刻なのである。

## おわりに

『作家の日記』1877年7-8月合併号第1章1節「モスクワの知人との会話 ある新刊書についての感想」(Разговор мой с одним Московским знакомым. Заметка по поводу новой книжки)で、ドストエフスキーは、「現代ほどロシアの家庭がぐらつき、安定を欠き、定義づけもされず、外形すら整っていないような時代はない。[……]現代のロシアの家庭はますます偶然の家庭となってゆきつつある」<sup>52</sup>と書いて、ロシアの家庭の現況について深い懸念を表明し、2節「再び偶然の家族について」(Опять о случайном семействе)で具体的な例を書いている。

突然、汽車の中に一人の紳士が入って来た。全くりゆうとした紳士で、外国を歩き回るロシア紳士のタイプに良く似ていた。彼は小さな息子の手を引きながら入って来たが、その子は年のころ八つばかり、それより上にはどうしても見えない、ひょっとしたら、下かもしれなかった。男の子は最新流行の、ヨーロッパ式の子ども服をこの上なく可愛らしく着こなしていた。可愛いジャケットをつけ、優美に靴を履き、透き通るようなシャツをつけている。父親がこの子に気を配っているのは明らかだった。ふいに、男の子は席につくが早いのか、「パパ、煙草をちょうだい」と父親に言った。[……]現代の父親には何一つ普遍的なものが無い。偉大なる思想が存在しない(喪失したのだ)、偉大なる信念が、彼らの心に存在しないのだ。ただこうした偉大なる信念のみが子どもたちの追憶に美しきものを生み出すことができるのだ！おお、墮落した父親であっても、遠い昔の偉大なる思想、それに対する偉大な信念を心の中で保持していたが為に、惨めな子どもたちの飢え渴いた感受性の強い心に偉大な思想と偉大な感情の種子を移し植え、他の事がどうあろうと、その善行だけの理由で後になって子ども達に許して貰える場合がよくある。肯定的かつ美しきものの萌芽なしに人を幼年期から人生へと巣立たせてはならない。肯定的かつ美しきものの萌芽なしに次の世代を旅立たせてはならない。<sup>53</sup>

「肯定的かつ美しきものの萌芽なしに人を幼年期から人生へと巣立たせてはならない」という『作家の日記

<sup>52</sup> Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.173.

<sup>53</sup> Достоевский. Дневник писателя. Т. 25. Л., 1982. С.177-8. С.180-1.

記』に書かれたドストエフスキーの思想と「父たる者よ、なんじの子どもを悲しませるな」というフェチュコーヴィチの演説は良く似ている。どちらも「偶然の家庭」でぐらつきつつある父子の望ましい関係についての提言を行っている。違いがあるのは、評論集『作家の日記』或いは芸術作品『カラマーゾフの兄弟』のどちらかで発表したかというジャンル上の差だけである。この評論が書かれた1877年7-8月から1年ほど経った1878年の夏に『カラマーゾフの兄弟』の執筆が開始されたことを、ヴェーラ・ザスーリッチ事件の裁判<sup>54</sup>の傍聴と関連付けながら、ソ連期のドストエフスキー研究者のグロスマンは次のように書いている。

ドストエフスキーも、勇気を示す事によって一般の愛を喚起した娘の無罪判決に共感を覚えた。[……]夜遅く、彼は感動し興奮し、創作意欲をかき立てられながら、一生涯悩まされ続けてきた、そして今やロシアの現実によって新たに高く掲げられた大きな問題に全身憑かれたようになって帰宅した。[……]1878年の夏からドストエフスキーは自分の史詩——『カラマーゾフの兄弟』の大規模な年代記にとりかかる。<sup>55</sup>

『カラマーゾフの兄弟』の執筆期間を通じて『作家の日記』は休刊される。『作家の日記』1877年12月号の最後の節、「読者のみなさんへ」(К читателям)で、ドストエフスキーはこう書いている。

定期刊行を休止するこの一年間に、私はある芸術作品の執筆に専念する。その作品の構想は、『作家の日記』を刊行してきたこの二年間の間に、知らず知らずのうちに成熟してきたものであった。しかし、『作家の日記』を、一年後に復刊することを、確信している。<sup>56</sup>

ドストエフスキーにとっての、『カラマーゾフの兄弟』執筆と『作家の日記』刊行の関係性、優先度と時間軸が、短い文章の中に凝縮されている。ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』最終号を1880年11月に発表し、1881年1月に『作家の日記』を復刊し、同年1月28日夜8時半にペテルブルグで急逝している。ドストエフスキーの優先度が芸術作品にあった事は書簡からも読み取れる。1879年8月13日に保養地エムスから妻アンナ宛てに出された手紙である。

現在私は『カラマーゾフ』を背負っている。見事に完成させる必要がある。宝石細工のような繊細さで仕上げなければならない。それなのに、これは骨の折れる、あぶなっかしい作品であって、どんどん力を

<sup>54</sup> 「1878年3月31日金曜日に、ドストエフスキーはペテルブルグ市長トレーポフを狙撃したヴェーラ・ザスーリッチ事件の審理が行われることになって地方裁判所に朝から出かけて行った。これは、拘留中の学生革命家ボゴリューボフが將軍の前で脱帽しなかったため彼を鞭打ちの刑に処すよう命じた將軍の言語道断な処置に対する報復であった。」レオニード・グロスマン／北垣信行訳『ドストエフスキー』筑摩書房、1966年、381頁。

<sup>55</sup> 同前、384-5頁。

<sup>56</sup> *Достоевский. Дневник писателя*. Т. 26. Л., 1984. С.126.

取られている。とは言え、これは運命を決する作品でもあるのだ。これによって名声を打ち立てなければならぬのだ。そうしないと先の希望は何もない。この長編を終え、来年末に『日記』の予約購読の募集をし、集まった予約金で領地を買う。次の予約までの生活費と『日記』を出す金は、単行本を売って何とか凌いでいく。<sup>57</sup>

手紙の力点はドストエフスキーにとり「運命を決する作品」である『カラマーゾフの兄弟』を見事に完成させる点にあって、遺産や資金繰りではなさそうである。ひょっとすると、ドストエフスキーが熱中している『カラマーゾフの兄弟』の執筆をアンナ夫人に継続して認めて貰いたくて、死後の心配や資金繰りに言及しているのかもしれない。アンナ夫人からの「領地を買う約束は履行できるの？」「次の予約までの生活費と『日記』を出すお金の工面は大丈夫？」といった予想される質問に対する答えが予め準備されている手紙である。確実な資金繰りもたらす家計の安定を一時的に放棄してでも『カラマーゾフの兄弟』執筆に向かう作家の最晩年の姿勢には保身の要素は微塵も感じられない。自ら運命を決する作品と呼び、徹底して芸術作品の執筆を優先させる姿勢、それは即ち、読者アルチュエフスカヤへの書簡で述べたように自分の長所が芸術作家であるというドストエフスキー自身の確信であっただろう。

ここでドリュコフ、グリゴレンコ、ドボリヤニーノヴァの三人による研究書に戻って、その結論の是非について述べてみたい。もう一度結論の部分を引用してみる。

悔悟する罪人にとって、地上のどの裁判も恐ろしいものではないし、体刑とて、魂の深淵から広がっていく贖罪行為のほんの小さな部分にすぎないのである。<sup>58</sup>

「魂の深淵から広がっていく贖罪行為」についてであるが、ドストエフスキーがシベリア流刑を経験する中で、他律的な罰の底の浅さに気づき、自律的な罰への沈潜を深めてきたことは事実である。『カラマーゾフの兄弟』でも自律的な罰に苦しむ登場人物についての記述がある。<sup>59</sup> 自律的な罰は、シベリア流刑を描いた『死

<sup>57</sup> *Достоевский*. Письма. Т. 30 Книга Первая. Л., 1988. С. 109.

<sup>58</sup> *Бирюков, Григоренко, Дворянинова*. Отражение социокультурных истоков суда присяжных в произведениях русской классической литературы. С.106.

<sup>59</sup> *Достоевский*. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 273-283. 第2部第6編第2章「謎の客」(Таинственный посетитель)の主人公は、出家直前の若きゾシマ長老に、14年前の殺人を告白し、「行って人々に告白なさい」というゾシマ長老のアドバイスにいったん従う覚悟をしたものの、踏み切れず苦しみ続ける。捜査が完全に打ち切れ、完全に忘れ去られた事件の事で、殺人者である主人公だけが、強くなる一方の良心の痛みに苦しんでいる。良心の痛みを取り除きたいという欲求と、妻や子どもたちに悲しみを与えたくない配慮、という両立し難い矛盾の中で、揺れ動き、苦しみ続けた主人公は、ポロポロになるまで追い込まれ、ついには、ただ一人秘密を知るゾシマ長老の殺害すら考えるが、ぎりぎりのところで回避し、名の日のお祝いの席で警察当局に陳述書を出し、最終的には安らぎを感じ、ゾシマ長老に感謝しつつ、一週間後死ぬ物語である。

*Достоевский*. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 482. 第4部第10編第4章「ジューチカ」(Жучка)で、アリオージャは自律的な罰に苦しむアリュージュヤに言及している。(「病気のあの子は、僕(アリュージュヤ)のいる前で、三度も、涙を浮かべて親父さんにこう繰り返していました。『僕が病気になったのは、パパ、あの時ジューチカを殺したからなんだ、神様の罰があつたんだ。』」)

の家の記録』から『カラマーゾフの兄弟』に至るまで、ドストエフスキーが後半生を通じて追及し続けたテーマである。自律的な罰の究極の形が、『カラマーゾフの兄弟』において、三人の登場人物によって示されている。その究極の形とは、「自分は全ての人間に対して罪がある」という自覚であり、これを自覚した後で、三人とも例外なく「愛し始める、或いは善行を始める」という贖罪行為を始めている。<sup>60</sup> 罪の自覚と贖罪行為を組み合わせた三人の倫理観は、それまでになかった斬新なものである。三人のうち一人であるミーチャについて、第4部第11編第4章「聖歌と秘密」(Гимн и секрет)から引用する。

おれがああ瞬間に《餓鬼》の夢を見たのはなぜだろう？『どうして餓鬼がみじめな目に会うのか』——この疑問はあの時におれにとっては予言だったのだ！おれが行くのは《餓鬼》のためだ。なぜなら、すべての人はすべての人に対して罪があるからだ。すべての《餓鬼》に対して、小さい餓鬼もいれば、大きい餓鬼もいる。すべての人が餓鬼なんだ。おれはすべての人に代わって行くんだ。なぜなら誰かがすべての人に代わって行く必要があるからだ。親父を殺したのはおれじゃない、しかしおれは行かなければならない。喜んで引き受けようじゃないか！<sup>61</sup>

ミーチャは、「貧乏人が焼け出され、赤ん坊に飲ませる乳も出ずに、焼け跡に立ちすくんでいる」《餓鬼》の夢<sup>62</sup>を見て、「すべての人間に罪がある」事に気づいたので、全ての人に代わって懲役に行き、懲役囚達と心を通わせ、彼らの為に尽くそうと思うと、懲役20年の判決を受ける裁判の前日に、アリョーシャに胸の内を告白している。先に引用したビリュコフ、グリゴレンコ、ドボリャニーノヴァの三人による研究書の結論が、ミーチャの告白を過不足なく説明しているかと言えば、疑問があると言わざるを得ない。「地上のどの裁判も恐ろしいものではないし、体刑とて、魂の深淵から広がっていく贖罪行為のほんの小さな部分にすぎない」の箇所についてだが、ミーチャが裁判や体刑を問題にしていないう事については誤ってはいないが、そもそもミーチャの魂は、裁判があらうが、なかろうか既に救済されている。ミーチャを動かしているのは、「すべ

<sup>60</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 262. 第2部第6編第2章「ゾシマ長老の早逝した兄」(О юноше брате старца Зосимы)で、早逝したゾシマ長老の兄マルケルは「全ての人間や物にたいして自分が一番罪が深い」と言い始め、周りの召使や小鳥や木々に謝罪、感謝し、愛し始める。

<sup>61</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 270-271. 第2部第6編第2章「ゾシマ長老の青年時代の思い出」(О священном писании в жизни отца Зосимы)で、ゾシマ長老は従卒アフナーシーを理由なく殴った事に罪深さを感じ、彼の足下に身を投げて謝罪し、僧院に入る。

<sup>62</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 31. 第4部第11編第4章「聖歌と秘密」(Гимн и секрет)で、ミーチャは、アリョーシャに「《餓鬼》の夢を見て『全ての人間に罪がある』事に気づいたので、全ての人に代わって懲役に行き、懲役囚達と心を通わせたり、彼らの為に尽くそうという啓示を感じた。」と胸の内を打ち明ける。

<sup>61</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 31.

<sup>62</sup> Достоевский. Братья Карамазовы. Т. 14. Л., 1976. С. 456-7. 「彼は、自分の心の中に、今まで一度も感じたことのないある感動が湧き上がって来るのを感じている。彼は泣きたかった。赤ん坊がこれ以上泣かないように、乳が干からび赤黒い顔の赤ん坊の母親が泣かないように、たった今この瞬間から誰の目にも涙一滴浮かばなくなるように、何かをしてやりたい、それもたった今、たった今なのだ。一刻の猶予もなしに、どんな障害があろうとも、ありったけのカラマーゾフ流の奔放さでもって。」夢の内容は、ドストエフスキーの全作品中でどの登場人物が見た夢より光明に満ち、はっきりと善行への方向性が示されている。

での人に対して罪がある」という倫理観と、その贖罪としての善行の開始だけである。言うまでもないことだが、「悔悟する罪人」であるミーチャが悔悟しているのは、「すべての人に対して罪がある」からであって、「親父を殺した」からではない。百歩譲って、「悔悟する罪人にとって、地上のどの裁判も恐ろしいものではないし、体刑とて、魂の深淵から広がっていく贖罪行為のほんの小さな部分にすぎない」がミーチャの告白を説明しているとしても、「ドストエフスキーが 90 頁の長きにわたってわざわざ裁判の場面を書く必要があった理由」については全く説明できないし、実際にも「無実のミーチャをドストエフスキーが懲役 20 年の実刑にしたのは何故か」について、一言も言及されていない。

ドストエフスキー自身も、ミーチャ、ゾシマ長老と早逝した兄のマルケルと同じく、罪の自覚と贖罪行為を組み合わせた倫理観をおそらく持っていたと思われる。「すべての人に対して罪がある」という倫理観とその贖罪としての「善行」は、ドストエフスキー自身が到達した究極の倫理観である。とても興味深いテーマであり、本稿のテーマである「無実のミーチャをドストエフスキーが懲役 20 年の実刑にしたのは何故か」と、大きなところで繋がっていると思われるが、ミーチャの「誤審」に絞って考察している本稿では、これ以上は触れない。

『カラマーゾフの兄弟』の裁判の場面を書いたドストエフスキーの意図についてさらに考えてみたい。小説を創作するにあたってミーチャを無罪にする書き方を選択する事もドストエフスキーには出来た筈である。ミーチャを無罪にすれば、第 1 章で触れたドストエフスキーの 1877 年 10 月号時点での『作家の日記』における主張との齟齬は何も起こらない。(ミーチャに無罪の評決を下す事は陪審員たちが真実を見抜いた事を意味するので、自ら苦しまぬ目的で懲罰忌避をするわけではない。弁護士の役割もスッキリしたものになる。元々無罪である人間を弁護するだけなので嫌悪すべき手練手管を使って陪審員たちを情状酌量に誘導する必要はない。)ドストエフスキーが敢えて有罪にする選択をしたのは、『作家の日記』では触れていない重要かつ新しい主張を『カラマーゾフの兄弟』で訴えたかったとしか考えようがない。それはアドヴォカシー<sup>63</sup>と呼ばれるものである。コルニーロヴァ事件で自らの筆力で世論を動かし、無罪判決に結びつけたアドヴォカシーの成功例をふまえながら、どうすれば喫緊の社会問題を解決する具体的な提言が出来るかをドストエフスキーは考えていたと思われる。確実な資金繰りがもたらす家計の安定を一時的に放棄してでも書こうとしていたのだから、具体的な提言を実行しておかないと、魂のやすらぎはないとまで考えていたのではないか。

結論を急ぎたい。「裁判の場面は、誤審の怖さを読者に訴える事と、望ましい親子関係についての提言を目的として書かれたものである。ドストエフスキーは誤審を不可避とは考えていない」というのが筆者の結論である。

「はじめに」で述べたように、この論稿が喚起すべき最大の問題点は、無実のミーチャが懲役 20 年の実刑に処せられた事である。誤審問題をドストエフスキーが重要な問題と考えている事は、第 12 編全体の題とし

<sup>63</sup> 英語では Advocacy。日本語では唱道、提言。ロシア語では проповедь が近いと思うが、いずれもびったりとは適合しないので、英語の表記を採用している。日本語の「社会啓発」とも重なる部分があるが、Advocacyの方が意味の範囲が広い。

て「誤審」を選んでいる事から明らかであろう。『作家の日記』では懲罰忌避の傾向が見られた陪審員たちが『カラマーゾフの兄弟』では被告を有罪にしている。同様に、『作家の日記』では手段を選ばず狡猾だった弁護士が『カラマーゾフの兄弟』では全ロシアに対して道徳律を発している、両アクターともドストエフスキーによって実際とは正反対の姿で描かれている。敢えて違う姿で描いた事実から、「懲罰忌避や嫌悪すべき弁護士の振舞い」よりもドストエフスキーが重視していた二つの根本的な問題が見事に炙り出されている。即ち、「公開陪審員制度は、ロシア固有のものでなく、外国を模倣したものである。偽善を撲滅し、万事を真実と真理によって進行させたい」<sup>64</sup> ということ、そして「父たる者よ、汝の子どもを悲しませるな」<sup>65</sup> ということ、これら二つが『カラマーゾフの兄弟』の第12編「誤審」でドストエフスキーが切に言いたかった事であり、ロシア社会とロシア国民に対する提言のために書かれたものであると筆者は考えている。『カラマーゾフの兄弟』を急逝 2 か月前に完成させたドストエフスキーは流れ動く時代の現実を理解する行動を最後までやめなかったのである。

(まつばら しげお)

## A Judicial Error in “The Brothers Karamazov” by Fyodor Dostoevsky Shigeo MATSUBARA

The article focuses on the Book Twelve: A Judicial Error, which describes in detail the trial of Dmitrii Karamazov, who was accused of murdering his father. The most mysterious part of the Judicial Error is why innocent Dmitrii was sentenced to twenty years of penal servitude, while the jury decision made to Raskolnikov, who had murdered the two sisters with the ax in “Crime and Punishment” was just eight years. Dostoevsky was a man of compassion, always ready to take up the pen to assault injustices perpetrated by Russia’s new court system, which had undergone a substantial reform in the previous decade. In this paper special attention is paid to the lengthy and impassioned closing remarks from the defense counsel in order to come as close as possible to know what Dostoevsky was trying to say both for the future of Russia’s court system and for the best benefit of the next generation. The feature of the defense counsel had been dramatically changed from the one Dostoevsky hated and criticized the most in “Writer’s Diary”. The reason why Dostoevsky changed the defense counsel’s feature probably has something to do with what the author was trying to say.

<sup>64</sup> *Достоевский*. Дневник Писателя. Т. 26. Л., 1981. С. 54.

<sup>65</sup> *Достоевский*. Братья Карамазовы. Т. 15. Л., 1976. С. 170.